

福島県の視覚特別支援教育の推進
より速く正確に、そして主体的に
～切れ目のない一貫した点字力向上を目指して～
福島県立視覚支援学校
教諭 渡邊 寛子

1.はじめに

地域の小学校へ入学する前に点字を教えてもらいたいという保護者の願いにより、平成22年7月、小学部体験入学の後に幼児（以下、生徒A）へ個別指導を開始した。5歳だった生徒Aに点字導入した筆者は、中途失明後、点字使用7年目であった。

夏休み以降、筆者の授業空き時間を活用して週2回、90分ずつ、計40回、東日本大震災の直前の3月4日まで続いた。4月から弱視学級へ入学し、8月1日付の人事異動で本校から赴任した担任に引き継がれ、5年生で本校小学部へ転入した。

中学部3年になった令和元年度、奇しくも筆者が国語を担当することとなり、令和2年度普通科1年の担任となったので、経過を報告する。

2 テーマ設定の理由

共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進の中で、幼児・児童・生徒一人ひとりが視覚障がい者としてたくましく生きる力をつけるには、長期的で一貫した、意図的な指導が必要であろう。

特別支援学校が地域支援センターとしての役割を担う現在、児童・生徒数の減少や多様化の中でも、地域での指導が難しい視覚障がい教育のノウハウを継承し、専門性を高め、学力の礎となる読み書き能力を伸ばしてきた経緯をまとめ、実践記録として今後に生かしたいと考え、本テーマを設定した。

3 実践経過

（1）生徒Aの実態

全盲女子 点字使用。

（2）就学前

ア. 教材の選定

保護者によると、2月に行、か行、さ行、た行と進み、その後5か月経っても、さ行が覚えられないというので、わかりやすい形から入る『中途視覚障害者への点字触読指導マニュアル』（澤田真弓・原田良寛 編著、読書工房）を使う。言語指示でどれだけ通じるか、1回で無理な場合は、本人が理解できる言葉に動作を添えて繰り返し、手指の使い方を取り入れた。

イ. 両手読み

左手優位で片手読みをするので、指示を出し両手読みを心がけた。疲れてくると片手がおろそかになることもあり、良い姿勢を意識させ、指を真っ直ぐに当てると、苦手な斜めの「か、な、や」の区別がつくことを実感させた。

ウ. 上下左右の混乱

既習文字が増えるにつれ、90度回転の「え、り、ろ、る」、鏡文字の「さ、き、の、よ」、「お、ら」、「し、と」、「つ、け」、「そ、ち」、「た、こ」、「く、ぬ、は、ゆ」などの混同が見られた。間が5～7日開くと、前回習った文字も忘れることがある。中途失明の大人と違い、推測読みができないので、文字が増えるほど、時間がかかる。「おそろ」まで読んで「しい」と推測できないので、「と」か「し」か迷うような場合が多い。

エ. 書きの指導

五十音が終わった後、パーキンスブレーラーでの書きに入ったが、読めないものは書けなかった。「ま」、濁音、拗音は厳しかった。点の番号では覚えられない。読みは縦2列、パーキンスのキーは横に左から「3、2、1、4、5、6」なので、切り替えが困難。圧倒的に触る機会が足りていなかった。

新しい動作に対し、1回の言語指示での理解は困難であった。

※空間認知・歩行、日常生活用具の情報提供は割愛。

(3) 小学校1～4年次（弱視学級）

教育相談支援室（現・地域支援センター「目の相談室 のびのび」）として、年1～2回の訪問、4年次は本校への来校での指導も行われた。

(4) 小学部5・6年次の関わり

ア. 文字能力テスト（校内版点字競技会 年2回）

点字使用者と墨字使用者に分かれての文字能力テストでは、高等部普通科の点字使用生徒B（全盲女子）と一緒に五十音書き、転写、聴写、速読に取り組み、会場への入室時のあいさつや、解答用紙を提出するときの言葉かけ、点字つきかるたとりでの積極性など、高等部生から良い影響を受けた。

イ. 合同自立活動（点字かるたとり）

小学部5年の3月に合同自立活動として、高等部2年時の生徒Bとの点字かるたとりを行った。1月の後期文字能力テストの残りの時間でサザエさんかるたの相对札（対峙した競技者が、両方の向きから取れるように、点字がはりつけてあるもの）で取り合ったところ、高い意欲を見せ、「次回は（文字能力テストが行われる）7月」というと、がっかりしていたことから、小学部と高等部普通科合同の自立活動として位置づけて3月に開催した。

(i) 点字かるたとりの概要

縦2段、横5枚の枠のあるかるた台に10枚並べ、読まれた札を速く持ち上げた方が勝ち。百人一首は下の句が表になっているので、歌を覚え、上の句を聞いた瞬間に取れると勝てる。何枚取れたかで勝負が決まる。相对札は相手陣の札も触察できる。かるた台を2枚縦に並べて20枚でも対戦できる。場所を覚える空間認知力が問われる。

（編集部注 この位置に写真が入っています。キャプション＝発泡スチロール製のかるた台にセットされたハッ橋型の黒白反転札。編集部注おわり）

(ii) 今回の内容

a. おやしギャグかるたとり（各自20枚、かるた台にセットして行う）

b. サザエさんかるたとり（前回の相对札で、最初のうちは相手の側から読む点を触って

いたこともあり、リベンジ)

c.百人一首かるたとり（五色百人一首黄色 20 枚、各自の好きなように並べて、上の句を聞いて下の句で速く取る。裏に上の句あり）

生徒Bは、五色百人一首を用いたかるたとりを経験済みなので、左手中指だけというハンデをつけたら、小学生に気を配りながら、花を持たせて互角な感じで展開した。

生徒 A は点字使用の理療科教員とペアを組み、取り札を 10 枚ずつ持ち、両手を使って良いこととした。最初は百人一首に慣れていないので不安そうだったが、取り札の枚数が減ってくると、だんだん取れるようになり、笑顔が増えた。

読み手が「読みます」と言ったら、取り札を触らないで待つのだが、前回の経験からか、またはルールを忘れたのか、読み上げが始まっても札を触って確かめている姿も見られたことに対し、「生きる力がついた」と周囲の教員は見守っていた。

競技が進むうち、一通り触り終わると「はい」と自分から申告してくれるようになり、さらに集中力がアップすると、返事に要する間隔が短くなってきた。最初のうちは気配でタイミングをみて「読みます」を言っていた全盲の筆者も、本生徒の「触り終わりました」の合図である凛々しい「はい」を待つようにした。

（編集部注 この位置に写真が入っています。キャプション＝マグネット式かるた台での対戦。編集部注おわり）

ウ. その後の文字能力テストでのかるたとり

(i) 2016 年 7 月（平成 28 年度前期文字能力テスト）

高3生徒Bと小6の生徒Aとの対戦 内容：坊主めくり、
おやしギャグかるた（相対札）、五色百人一首（桃色 20 枚）
高3生徒Bにハンデ：左手のみ

(ii) 2017 年 2 月（平成 28 年度後期文字能力テスト）

内容：五色百人一首（緑色 20 枚）

生徒 A には1週間前に緑色 20 首を配布。生徒Bは全く覚えず、本番の触察だけで取る。筆者と生徒 A が取り札を 10 枚ずつ持ってチームを組み、生徒Bが両手で全力で対戦。15 対 4 で生徒 A の勝利。生徒 A は後半、取り札の枚数が減ってくると、積極的に取りやすく並べ替え、上の句を聞いて一瞬で取ることができた。

エ. 小学部 5・6 年合同自立活動（点字・黒白反転拡大文字つきかるたとり 2017 年 3 月）

小学部 5 年児童 C（弱視難聴女子）と小学部 6 年生徒 A との対戦。校内の文字能力テスト点字の部は、かるたとりをやっていることを聞いた小学部 5 年児童 C からの希望により実現した。児童 C は、5 年生で本校へ転入したが、3・4 年生次に月 1、2 回の来校相談で筆者が点字を導入した。

(i) サザエさんかるたでウォーミングアップ。取り札 20 枚。

(ii) 五色百人一首。前日に渡した青色 20 枚。

(iii) 一字決まり、二枚札、大山札（きみがため）計 19 枚。

覚え方を伝えながら取り札を台にセットすると、二人とも必死に覚えて、取るスピード

もアップし、競技かるたらしくなった。経験者生徒 A がとりやすいように並べ替える姿を見て、弱視児童 C も並べ方を工夫したりしていた。一字決まりになると、上の句の出だして二人とも一瞬でとれて、それが楽しく、次回へつながっていきそうだった。

(5) 中学部 1・2 年次の関わり

ア. 大会に向けての朝練

1 年次は、東北地区盲学校文化・体育大会の点字競技会、2 年次は全国盲学生点字競技大会（両大会とも通信大会）の選手として、11 月 1 日の本番前に 2 週間ほど朝練を行った。この結果、後期の文字能力テスト（2 月実施）で、速読や転写に伸びが見られた。「朝早く登校し点字の読み書きをすると、1 時間目から冴えていて良い」という教科担当者たちからの声もあった。寄宿舎から早く朝食を済ませて登校することは、最初は大変で、5 分遅刻が多かったが、だんだんと早く来られるようになった。

イ. 音読の宿題を録音で提出

2 月の文字能力テスト後、国語の音読の宿題の確認として、寄宿舎で IC レコーダーに録音して提出という取り組みをし、速読には意欲的に取り組んだ。

ウ. 中学部速読（1 分間）の記録

- (i) 中学部 1 年 200～240 文字程度
- (ii) 中学部 2 年 220～290 文字程度
- (iii) 中学部 3 年 240 文字程度

(6) 中学校 3 年国語教材を活かした点字指導の実際

ア. 各種目標の設定

令和元年度の目標「3 年生で、受験もあるので、さらに勉強を頑張る。下級生のお手本になれるようにする」。国語の目標「自分の考えを詳しく書いたり話したりできるようにする」。将来の目標「視覚支援学校の先生」（4 月）、「シンガーソングライターか、ラジオパーソナリティ、視覚支援学校の先生もあり。どちらも言葉が大事なので、勉強をがんばる」（7 月）。

イ. 点字盤での書き

日付を書くときに「下がり数字で」と指示したら、月が上で、日にちが下という 4 月 8 日だったので正しい書き方を確認。音楽の拍子と混同しているか？ その後も 6 月の入院明けの 7 月には、下がり数字に数符が二つという表記あり。

ウ. 速読の推移（1 ページ 18 行 初見）

- (i) 6 歳（五十音終了後、就学前 1 月）

清音のみ『浦島太郎』1 ページを 30 分程かかり、これは中途失明の読書嫌いの 30～40 代と同じレベルと考えられる。困みに筆者は 5、6 分。

- (ii) 9 年後（視覚支援学校中学部 3 年 4 月）

a. 小学生高学年課題図書『チームふたり』

最初はストーリーの予想がつかないので遅い。卓球のシーンで「うちわがわり」「上回転、下回転」は経験がないので文脈の予想がつかない。「市大会」も意味がわからずスピードが落ちる。

b. 中学生課題図書『天馬のように走れ』

江戸時代の話。「如来」「瑠璃観音」「孝謙天皇」「家康ゆかりの地」「駿府」など語彙が難しい。「長州」を「どうしゅう」と読む。「京を出て…」で文脈がとらえられず、「きよ」なのか「ご」なのか迷ったか、沈黙3秒くらい。「孔子の孝行」の意味がわからないので「講師の高校」とイントネーション対比。8ページ読み進めると「孔子」の発音が正しくなる。『論語』『大学』など中国の漢文の書物だとわかってきて、速く正確なイントネーションになる。

エ. 中学3年国語教科書における実践例

(i) イントネーションとスピードから読解力をはかる

前記ウ(ii)の結果を踏まえ、詩『春に』(谷川俊太郎)の予習をしていないことを確認して音読させたところ、「よどみ渦まきせめぎあい」のところでスピードダウンした。

(ii) 点字表記で気をつける語

「あしたとあさってが一度にくるといい」:「一度」は数符を使わない。「いっぺんに」という副詞的用法。

「そのくせ」:マス空けしない。「それなのに」と言い換えられた。「癖」の意味なし。

(iii) わからない言葉の意味調べ

教科書脚注には意味調べの指示が「もどかしい」しかなかったので、生徒Aはこれしか調べなかった。初読時にスピードの落ちた「よどむ」「せめぎあう」の意味を確認したところ、答えられなかったので、再度次回までに点字辞書での意味調べを指示した。「せめぎあう」では載っておらず、「せめぐ」で調べて考えたとのこと。筆者の予想以上の意欲的な取り組みがみられた。

(iv) 定期試験から定着をみる

短文作り「よどむ」は不十分、「せめぎあう」「もどかしい」は空欄。教科書ワークに出ていない発問には正解できていなかった。

(v) 次の題材へ主体的に活かせるか?

小説『握手』(井上ひさし)では、やはり欄外に指示されている語句以外は辞書引きする余裕がなく、「傲慢」など読解を深めるために重要な語句はわかっていなかった。

<誤読例>

・「捨て子には『せいめい』がない」→「生命」だと思っていた。「『中学生たちがせいめいをつける』とは?」と重ねて問うと、「カ?」と回答。「せいめい」の「めい」は「名前の名」と言われても反応が薄かった。

・「おおぐらい」→大きな位。「大食い」「食らう」「食う」「食らいつく」などの語感の違いに納得していた。

4 考察

中学部1年・2年の国語の授業の中での速読の記録からわかるように、語彙の易しい小説や随筆は10月の朝練と録音課題を経て、文字数が伸びているが、『モアイは語る』(安田喜憲)のような説明文などはやはり伸び悩んだ。文字能力テストの速読(1分間)でも「秋の田のかりほのいほのとまをあらみ…」などの和歌が、突然、現代文中に引用されているよう

なもの、極端に落ちた。中学部3年で学習したばかりの井上ひさしにちなんだコラムを出題したら、数字的には240文字であったが、速読しながら、内容が井上ひさしだとわかってくると、急に速くなり、笑顔があふれる速読へと変わっていった。

中途失明の筆者自身の経験から、そして、点字導入した生徒を個別指導から教室へ戻すタイミングを見極めるためにも、教科書1ページをどのくらいで読めるかという観点で記録をとり続けている。これは、定期考査で試験問題を何ページまでなら触読できるか見極める根拠となっている。また、学年相当の語彙でどのくらい読めるかということで、対象学年がはっきりしている課題図書や、文章の質がわかりやすい新聞のコラムを読み教材として活用した。

書く力を伸ばすために、マス空けやレイアウトを考えさせながらのノートテイクを心がけている。筆者が担当する国語以外は片面書きのパーキンスプレーヤーなので、点字盤で意図的に、裏面を活用し、小見出し符や点訳挿入符などの記号を使い、行を空けるなどして、試験前の復習に検索しやすいノート作りを目指している。

『論語』から「学びて時にこれを習ふ」では、注の語句を点訳挿入符を使って丁寧に音と訓で書き取った。敬称、機会、体得、習熟などである。「学習」の語源ともいえる章句に、「勉強」との違いを「初めて知った」と驚いていた。この実践は、音声読み上げソフトPC-Talkerの「詳細音訓」に近い形で、記憶させていくねらいである。高等部普通科の点字使用生徒たちに有効であった、パソコンでの同音異義語の書き分けの基礎としても、漢字の知識の定着を一年早く、時間をかけて行っている。

普段は一人の授業ではあるが、校内の文字能力テストで、点字使用者として学部を超えて先輩や後輩と関わり、受け身から徐々に主体的な発言、行動がみられるようになってきている。点字辞書での予習としての辞書引きも、今後は、「最低限」から「自主的にわからない言葉を調べる」までになれば良いと考えている。

先天盲の速読の向上は、文脈を推測する力、つまり、語彙力、漢語（音読みの熟語）の知識によるところが大きいと考える。主体的に意味調べをし、多読を心がけるよう、社会で活躍している点字使用の卒業生たちを例に出しながら、生徒Aのモチベーションを高めているところである。

5 終わりに

本県のインクルーシブ教育システムの中では、地域の小学校で学んでも、支援教員は講師であり、視覚障がい教育に初めて携わる場合がほとんどである。そんな中、本生徒は、本校教諭が弱視学級の担任として赴任するという恵まれた環境であった。

しかし、東日本大震災で人事異動が4月1日には行われず、1学期間、転勤が決まっている教員により、視覚障がいには配慮されない生活を送ったという。そのために、点字の触読には、3月までにはみられなかった癖がつき、2学期に赴任した担任が矯正するのに冬までかかったという。「切れ目のない」ということは、他にも、小学部から中学部へ上がり、教科担任制になったときにも考えられた。準ずる教育を受ける生徒がいない中での点字使用者の入学は、視覚支援学校中学部でも共通理解による一貫した指導方針が求められた。そのよ

うな中で、本生徒を長期的な展望で伸ばしていくために、ケース会や各教科会が大きな役割を果たした。

学部を超えた国語の担当者間の情報交換、実態の把握・共有、授業公開・研究により、生徒個々の夢に寄り添う指導が継続されている。